

宿根木

佐渡島の南端に位置する宿根木は、かつて賑やかな港として栄え、多くの船大工が住んでいた歴史ある街です。裕福であった船大工や廻船の船長の家が、佐渡島を世界地図に掲載させることに成功した地図学者の柴田収蔵氏（1820～1859 年）の住居とともに、今でも宿根木に残っています。保存された街には 200 軒の家屋があり、このうち 20 軒ほどに人が住んでいます。来訪者は、狭い路地を歩き、石置き木羽葺きの屋根や分厚い石の橋など、伝統的な建築を観察することができます。

宿根木の地質は街並みと同様に魅力的です。宿根木、さらには同様に海岸沿いにある近くの琴浦の土地は、海底火山の噴火によって作られました。時とともに海の波によって火山岩に洞窟ができ、現在 11 か所の自然の洞窟がそこに存在します。さらに、宿根木の隣にある相馬崎隧道は、塩の生産に利用された人造の洞窟で、たらい舟の保管に使われることもありました。さらに内陸に進むと、仏様の絵が岩に彫られた岩屋山洞窟があります。

宿根木は、本州の北部と瀬戸内海の商業都市大阪を結び、日本海の海岸に沿って進む北前船の航路にある寄港地でした。北前船による交易は 1672 年に正式に始まり、その後航路は北海道にまで延びて、宿根木に大きな富をもたらしました。江戸時代（1603～1868 年）の佐渡島における全商いの 3 分の 1 が、この街で行われました。この航路を定期的に行き来した木造船は、最大 150 トンの品物を積むことができました。佐渡の商人は大阪まで移動し、航海の途中途中で品物の取引を行い、再び佐渡へと航路を取りました。1 回の往復に丸 1 年かかることもありました。この交易に使われた木造船はとても軽量で、復路には積み荷が空となった船が強風で転覆する恐れがあったので、船を安定させるために石が積まれました。これらの石の 6 つが、今でも宿根木近くの海岸線に沿って置かれ、当時を偲ばせてくれます。